

アイヌ民族博物館 北海道白老町若草町2丁目3番4号

コタンメール

第7号 2002. 12. 10発行



秋のコタンノミ（集落の祭り）



11月16日、アイヌ民族博物館のポロチセで、伝承事業の一環として、「コタンノミ」と呼ばれる伝統的な儀式が行われました。

当日は、伝承課の山丸郁夫さんが祭主を務め、白老をはじめ遠くは旭川などからも、多くの方々が参加してくださいました。

今では見られなくなったこのコタンノミは、かつてのアイヌの生活の中では、重要なもののひとつでした。アイヌの人々は、自然の中にはさまざまなカムイ（神）が存在していると考えており、

生活のさまざまな場面で、カムイの恵みに感謝し、コタンの皆が健康に暮らせるよう祈りを捧げました。そのなかでも、春と秋の季節の初めに行われるコタンノミは、集落全体で協力して行う、大切な儀式だったのです。

アイヌの人たちは、自然界の至るところで、カムイが人間の行いを見ていると考えていました。そのため人間が自分勝手に、食べる分以上のシカやサケなどを捕ったり、川を汚したりすると、カムイが怒ってシカやサケを人間の世界にもたらさなくなってしまうとされていたのです。そうなる人間は食べる物がなくなり、生きていくことができなくなってしまいます。

このような自然に対するアイヌの考え方からは、現在の私たちも学ぶべきところが多くあります。伝統的な儀式を伝承するということは、アイヌ文化を学ぶという意味だけではなく、今の暮らしを見つめなおすための、よい機会ともなるのかもしれない。（野本正博）

国連人権委員先住民調査

アイヌに対する差別状況についての調査のため国連人権委員会先住民族特別報告者であるロドルフォ・スターベンハーゲン氏一行が11月26日、アイヌ民族博物館を訪れました。

この調査は、1994年12月に国連が定めた「先住民の国際10年」が終了する2004年に「先住民の人権と基本的自由の状況に関する特別報告」をおこなうためのもので、世界各国の先住民族の人権と基本的自由の侵害に関して、政府、先住民族、関係団体等から情報収集をおこなっています。

白老の調査では、特に北海道ウタリ協会白老支部の女性会員からアイヌ女性に対する差別の問題や学校での差別を中心に聞き取り調査がおこなわれました。参加者からは「結婚に関する差別はまだあだある」「白老から来た、というだけでお前アイヌだろといわれる」「アイヌであることには誇りを持っているが、アイヌという言葉で呼ばれるのは嫌だ」など、現在もアイヌに対する差別はあると答えていました。

差別する側と差別される側、どちらの意識も変わらないと問題は解決されないように思います。もちろんそのための環境作りは重要です。（村木美幸）

台湾原住民ブヌン族来館

去る12月3日（火）、海外からお客様が来館しました。受付のゲートをくぐる女性達のそのきらびやかな民族衣装に見とれてしまいました。

一行は、台湾の原住民・ブヌン族の皆さんです。ブヌン（布農）族は、かつては台湾中央に位置する海拔3000m級の、雪が降る高地に住んでいた山岳民族です。台湾原住民11族の中でアミ族・タイアル族・パイワン族に次ぐ大きな民族で、主な生業は焼



畑農業・狩猟でしたが、日本の統治時代にその多くは平地へと強制的に移住させられ、現在では台中市に近い南投県東埔で農業に従事する人々がほとんどです。

今回の来日は、1999年の台湾大地震で大きな被害を受け、その復興と民族の経済的自立のために観光を役立てようという目的から、観光と文化伝承について学ぶために来日したとのこと。

当館ポロチセでは、ブヌン族とアイヌ民族の芸能をお互いに披露しました。ブヌン族の美声は世界的にも有名で、何層にも重なり合う声の調和は本当に素晴らしいものでした。またブヌン族は穀物の「粟」を非常に敬い、「粟」に関する儀礼も多く見られます。

「雨乞いの祈り歌」では、虫よりも小さな声が、時間をかけてゆっくりと大きな祈りの声となって天に届き、それを聞いた天が感動して雨を降らせるというお話から、美声の素晴らしさもさることながら、アイヌとは違うブヌン族の精神世界に触れられたような気がしました。
(伊藤栄子)

まめ知識1・ウタちゃんの巻

今年の流行語大賞は「タマちゃん」。ご存じ、夏休みの日本人をいやしたあのアザラシのことです。だけど、そのちょっと後、9月はじめに3日間だけ三陸の歌津町に現れたウタちゃんのこと、覚えてます？ 歌津町は宮城県北部の町で、町名の由来はアイヌ語だそうです。

「蝦夷語のオタエツ（砂の岬の地）が長い間に転訛してウタツになったという説がある」（歌津町町史より）。この説によれば、語源はアイヌ語のオタ・エトゥ「砂浜・岬（鼻）」で、根室管内の尾岱沼と一緒です。

「なんで宮城県にアイヌ語？」と思われるかも知れませんが、東北地方はもともとアイヌ語族（エミシ）の領土。特に北部は現在もアイヌ語地名が色濃く残っています。

例えば、縄文遺跡で有名になった三内は「(雪

解けて洪水が)出る川」、比内鶏の比内はピツナイ（小石の川）。名字を見ても、千円札の新渡戸さんはニツオベツ（流木が多い川）が訛ったもの、長内さんはオサツナイ（川尻が伏流して涸れる川）、五十嵐さんはインカラウシ（見張り所＝遠軽と語源は一緒）、金田一さんはキムタウシ（山の方にある沢）等々、東北のアイヌ語地名に由来する名字は珍しくないそうです。（山田秀三『東北・アイヌ語地名の研究』草風館、1993年）。

ところで、流行語大賞受賞に気をよくしたのかアザラシ君、12月10日、サロマ湖に200頭の大群となって現れました。ひょっとしたらウタちゃんもその中に混じっているかも知れません。だって海に境目なんてないわけですから。それを知っている常識あるアザラシたちは「私は純粋な日本人」などと思いついで偉そうにしている非常識な人達を、「ガウ、ガウッ」と嘲笑っているのかもよ。
(安田益穂)